



2020年(令和2年)

11月号(No. 906)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

「ブラタモリの登山」のすすめ

久住山・由布岳・英彦山を舞台に…	1
100年目のクワウンナイ川廻行	
先蹤者大島亮吉らの足跡をたどって…	4
英国山岳会に寄贈した五百城文蔵の掛け軸の行方…	7
2020年度自然保護全国集會を	
奈良県吉野町で開催…	8
令和2年度 第10回登山教室指導者	
養成講習会の案内…	9
「山の日」を起爆剤に「越後YOUTH」スタート…	10
追悼…	11
Climbing&Medicine・85…	12
新入会員…	12
活動報告…	13
山行委員会／緑爽会…	14
支部だより…	14
静岡支部／東海支部／北九州支	
部図書紹介…	17
図書受入報告…	17
会務報告…	18
ルーム日誌…	19
会員異動…	19
INFORMATION…	19
編集後記…	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
★新型コロナウイルス感染防止対応のため、当分の間、取扱時間を短縮します。平日13時～20時

「ブラタモリの登山」のすすめ 久住山・由布岳・英彦山を舞台に

横山秀司

NHK総合テレビの「ブラタモリ」が人気だ。タレントのタモリが日本各地を旅して歩き、独自の目線でその土地の地形や地理にフォーカスして専門家とやり取りする紀行・教養バラエティ番組だが、我々登山者もその視点を持って、改めてフィールドである山の地形や地質、それを取り巻く歴史などに想いを馳せてみたいもの。

「ブラタモリの登山」とは

そもそも、私が九州産業大学の研究室で九重山のジオツーリスト・マップ(GTマップ)を作成しているときに、事務職員の磯野君(日本山岳会・北九州支部会員)が訪ねてきたことがその発端である。GTマップの説明をしたところ彼は興味を持ち、この地図を持って久住山に登ろう、ということにな

った。そして、彼はこの山行を「ブラタモリの登山」と称して、北九州支部会員に参加の募集をしたのである。私の作ったカラーの地図を手にして、ジオルートに沿って登山し、ジオサイトで立ち止まって、地質・地形などの解説を私が行なうという、「ブラタモリ」のスタイルに似ていることから、「ブラタモリの登山」と名付けたのである。

では、GTマップとは何か。ジオパークや自然公園などにおいて、珍しく貴重な地質露頭や地形が存在する場所、地質構造や地形の成り立ちが理解できる場をジオサイト(Geosite)と言い、それらを結んだ道がジオトレイルである。地質図や地形図をベースにした地図上にジオトレイル、ジオサイト、観光案内所、トイレ、宿泊施設などを記したのがGTマップである。ジオトレイルに沿って歩いて、ジオサイトを理解するには、縮尺2万5000分の1程度のものが相応しい。近年、イタ

九重火山のジオツーリストマップ 牧ノ戸峠～久住山



図1 九重火山のGTマップ。裏面に解説がある(現物はカラー)



写真1 西千里ヶ浜の先の鞍部東側、避難小屋の立つ火口跡



写真2 冷え固まった肥前ヶ城溶岩ドームの末端

リアやスイスではこのような地図が作成されている。そこで、私はそれらを手本に大分県の姫島村（二島一村）の全域のGTマップを制作した（『日本山岳文化学会論集』第16号、2018年に掲載）。

次いで作成したのが、九重山の一部、牧ノ戸峠から九重火山の主峰である久住山（1786m）までの登山コースを中心とした縮尺1万4000分の1のGTマップである（図1）。まず2万5000分の1の地形図「湯坪」「久住山」をA4横のサイズに収まる大きさに拡大コピーした地形図（1・1万4000）を基図として、地質をカラーで表現した。そこに新規・旧期

の爆裂火口や噴気孔を記入し、ジオトレイル（登山道）、トイレ、避難小屋、駐車場、売店を加えた。また、このルートに沿った地質・地形を理解する上で重要な地点をジオサイトとして①～⑫の記号を付けた。GTマップは四つ折りにし、裏面にはジオサイト①～⑫の解説文を記載した。番号を記した地点に立ってその解説文を読めば、その場の地形・地質、そこから見渡すことのできる周囲の地形などが理解できるように記載した。

久住山の「プラタモリの登山」

2018年10月13日、参加者14名が出発地の牧ノ戸峠に集合した。

九重火山は多くの火山体によって形成されていることが特徴であるので、GTマップに彩色された個々の火山をまず確認した。出発後、約20分でジオサイト①の展望台に到着。ここから北を望んで星生山や三俣山の溶岩流の末端を確認し、長者原と湿原は岩屑なだれによって堰止められたこと、飯田高原は断層によって形成されたことなどを説明した。

②③では15万年前に噴火した杳掛山火口壁を、地図と地形の観察によって確認した。④～⑥までは5～1万年に噴火した扇ヶ鼻溶岩上を歩いた。⑦には仁田窪と呼ばれる窪地がある。これは約3500年前に水蒸気爆発をした火口跡である。参加者は、これは単なる窪地であると思っていたが、火口であることに驚いたという。参加者はその背後にあるもう一つの窪地も火口であることをすぐに理解した。

⑦からは西千里ヶ浜の埋積された旧火口の平坦な道を歩き、⑧の鞍部に上る。ここでは西側と東側に見える窪地が火口跡であることを確認する。東側の窪地⑨にはトイレと避難小屋があり（写真1）、

登山者の休憩場所となる所であるが、ここが火口であったことを参加者は初めて知ったようだ。⑩では、1995～96年に小規模な噴火活動をした硫黄山が、現在でも噴気を上げている様子を観察する。⑪は水蒸気爆発の跡である空池を見ながら久住山の溶岩ドーム斜面の急登を登って頂上へ。

頂上⑫では、360度の展望を楽しんだ後、肥前ヶ城溶岩ドームをGTマップで確認し、実際、目の前の地形が溶岩ドームであることを、溶岩の末端部分が冷え固まった形態から理解した（写真2）。久住山を含め、周囲には溶岩ドームを形成している火山があるが、これらは主に安山岩やデイサイトなど、粘性の大きな地質によるものであることを説明した。

これで、その日の解説は終わりとし、帰路は復習をしながら牧ノ戸峠へ。参加者はこれまで、路傍の花に目をやることはあっても、地形や地質に注意を払うことはなかったが、地形・地質の成り立ちを理解しながら登山することに興味を覚えたと言う。来年も実施を、という声があり、由布岳で行なうことに決めた。

由布岳の「プラタモリの登山」

かつて私は、「景観としての山・由布岳考」(九州高等学校編『由布岳』、海鳥社、2013年)の執筆を依頼されたときに、地形学図と植生図を作成し、地形の成り立ちと植生について論じた。その経験があったので、今回の由布岳の「プラタモリの登山」を計画した。

2019年6月8日、参加者は由布岳正面登山口に集合した。由布岳はコニーデ火山とされていた時代があったが、四方に側火山を持ち、北と南斜面は火砕流で覆われ、頂上付近には約2000年前の溶岩と噴火口を持つ特色のある



写真3 正面登山口から見た、端正な姿の由布岳

火山である(写真3)ことを、配付した地形学図を参照して説明した。

まず野々草火砕流堆積物上のやや緩やかな草地の斜面から、ミズナラ、カエデなどからなる樹林の中を快調に登った。合野越で休憩後、登山を再開。ここからは由布岳の主火山溶岩となる。登山道がジグザグになったことから、溶岩がやや急な斜面を形成していることを納得する。見晴らしの良い場所、側火山である端正な山体をした飯盛ヶ城とその火口を確認した。また、正面登山口の南に東西に連なる山稜(水口山)の北向き斜面が由布院断層(正断層)による断層崖であること、さらに、この断層崖の一部は慶長元(1596)年の別府湾を震源とする地震によって崩壊し、ながれ山となって津江付近まで到達したことを、地形学図を見ながら説明した。

標高1200m付近の森林限界を超える、花の時期をやや過ぎたミヤマキリシマが現われるようになった。由布岳の森林限界が低いのは、乾燥しやすい火山地質からなり、風当たりの強い独立峰であること、また、約2000年前に活動を終えた新しい火山である

こと、さらには人為的影響(採草のためか?)によるものである。

由布岳山頂溶岩(安山岩)が溶岩ドームを形成している斜面に変わると、ジグザグ道は一段と急になり、皆の足の動きが鈍くなったが、ようやく由布岳火口の縁に当たるマタエに到着した。昼食後、東峰山頂(1580m)を目指した。山頂付近には、2200年前ごろに噴火した直径300mの大きな火口と、その後に噴火した4つの小さな火口があることを地形学図で説明したが、残念ながら霧でその姿を確認することができなかった。

英彦山の「プラタモリの登山」

2020年9月に、北九州支部20周年記念山行の一つとして、地元福岡の英彦山で「プラタモリの登山」を実施する計画を立てていたが、新型コロナウイルスの影響で来年に延期となった。英彦山は400〜570万年前の溶岩・火砕岩によって重層的に形成されており、それが現在の地形に表現されている。また、かつては英彦山修験道の聖地であり、その宿坊はなだらかな斜面の地すべりの地形(崖錐堆積地とされている)に立地

していた。そして、修行をした49の窟は、凝灰角礫岩の分布域にあることなど、地形・地質と歴史との関係が見られる。

さらに、英彦山では山麓から頂上に向けて4つの聖地構成がなされており、その境目に鳥居を設け、それぞれ異なった禁忌があった。奉幣殿から登るとすぐに石の鳥居がある。ここから上は実報厳土(菩薩界)となり、牛馬・死を忌む場所であることから、自然に手を加えず保護されてきた。そのため、ここにブナの自然林が残されているのだ。さらに木の鳥居から頂上までが常寂光土(仏界)となり、唾や大小便の禁の戒律があった。山頂(中岳)には英彦山神社上宮がある。ところが現在、山頂の一段低い場所に簡易トイレが設けられている。「常寂光土にトイレとは、なにごとぞ」という意見もあったようだが、バイオトイレにすることで許可が下りたようだ。

英彦山の地質、地形、植生と修験道の歴史などの関係を、正面登山口から登りながら解き明かそうとしたが、来年の実施となった。(北九州支部会員、九州産業大学名誉教授)

REPORT

100年目のクワウンナイ川遡行
先蹤者大島亮吉らの足跡をたどって

北海道支部 田中 健

大島亮吉が北海道の地を踏み、「石狩岳より石狩川に沿うて」と題して、その様子を書いた山旅を行なったのは、大正9（1920）年7月、20歳の夏のことだった。そこで日本山岳会北海道支部では、ちょうど100周年となる今年7月に、大島たちの足跡をたどる支部山行を企画・実施した。

*

大正期から昭和初期にかけ、アルピニズムというヨーロッパの登山思潮を紹介するとともに、自ら先鋭的な岩登りやスキー登山を実践した大島亮吉。昭和3（1928）年、まだ28歳の若さで前穂・北尾根に逝ったが、その著作の数々は、山岳文学の古典として今に至るまで長く読み継がれている。

草創期の慶應義塾山岳部で活躍し、北海道には大正9年と大正12年の夏に訪れ、まだ登山者の少なかった時代に、いわば探検的な登山を行なっている。もっとも、大島（と田中三晴）が大正9年にたど

ったルートは、「大雪山の父」と呼ばれる小泉秀雄が登った所を彼の助言に従ってなぞったもの。小泉と行をともした成田嘉助（と高橋浅市）を案内人に雇っており、嘉助についていった側面が強い。

それでも、大島の情緒あふれる文章が多くの岳人に北の山への憧憬の念をかき立ててきたことを考えれば、その文章を基に100年後に同じルートをたどることも無意味とは言えまい。

大島たちの大正9年7月21日から31日の山行ルートは、松山温泉―クワウンナイ―トムラウシ―ヌタブヤムベツ―石狩沢―石狩岳―ユニーシカリ―ユニーシカリ―石狩川―大箱―層雲別―留辺志部。松山温泉は現在の天人峡温泉、ヌタブヤムベツはヌタブヤンベツ川、ユニーシカリは由仁石狩川、大箱は大函、層雲別は層雲峡、留辺志部は上川町市街のことである。私たちの今回の山行ルートは、詳細がほぼはつきりしていて比較的

歩きやすい、その前半部分とした。天人峡から北海道で一番有名な沢登りルート・クワウンナイ川を遡り、稜線から日本百名山のトムラウシ山を往復、化雲岳、五色岳へと縦走路をたどって、忠別岳とのコルからヌタブヤンベツ川を降り、石狩川本流へと出る2泊3日の行程である。

100年変わらぬ滝の瀬十三丁

7月24日5時30分、小雨降る中、私たち5人はクワウンナイ川に入った。この日は下流部のゴルジュと柱状節理の両岸を抜けると、近年の台風で荒れて木のない広い河原を、徒渉を繰り返しながら遡っていく。このあたりは100年前どころか10年前と比べても変わっている。雨は断続的に降り続き、水量は多め。大島が右岸の稜線に見たと書く「真実『白糸の如き』と言う形容詞に相応した細い一条の瀑布」は雲に包まれて確認できなかった。13時過ぎに幕営地のカウン沢出合に着く



滝の瀬十三丁のナメ歩きを楽しみながら進む

ころには、雨もやんでいた。

25日6時に出発するころには、また雨が降り出す。1時間足らずで魚止めの滝。そして、高さ10mの滝を登ると、いよいよクワウンナイ川の代名詞「滝の瀬十三丁」が始まる。命名者は小泉秀雄。大島の「石狩岳より」から有名な箇所を引用しよう。

《この滝を劃然たる境界にしてクワウンナイは下流の傷ましい荒廃した光景から全くユニックな河相を展開し



〆両門の滝、となっている1160mの二股

ている。安山岩の少しも大きな凹凸のない河床を一杯に清冽な水は無数の水泡を浮かべ飛沫を跳ね飛ばして淙々とした音を立てて流れてゆく。ただにその河床は数町にて終わらず、屈曲して河身の見えない処までつづいている。潺々たる水、瑠璃玉のような水泡、すべてが河床を迂るように流れてゆく。我々はこれまでの尖々しい感じはこの明媚な秀麗な景趣に洗われ一種の幽趣を帯びた、まるで南宋画にあるようなこの景図のうちを歓声を挙げつつ進んだ

私たちの前には、舗装道路のよなナメがはるか彼方まで続いている。100年前と全く変わらぬ姿に見え、感慨もひとしお。ここは何度来てもいい。各自思い思いにナメを楽しみながら歩く。いつの間にか雨は上がっている。

やがて、前方に左右2つの滝が見えてくる。「すでに十数町もこの美しい瀬がつづいて、クワウンナイは左右に分れている。両方共に数丈の滝となつて(中略)左の滝を登れば前面は再び同じような画のごとき光景が展開された。滝の瀬はまだ続いている」と大島が書いた1160mの二股。左の本流の滝の先に傾斜が急になったナメが続き、陽が差し中、フカフカのコケを踏んで進む。

1時間半ほどナメを歩き続け、高さ8mのナメ滝を越え、滝の瀬十三丁は唐突に終わる。大島たちはこの先で野営しているが、少し行つた1300m付近にある通称「オーバーハングの滝」への言及はない。

ここは右岸の岩場から高巻くしかないが、近年、崩壊が進んで難易度が増し、私たちは1時間を要した。そんな難所の記述がないの

は、当時は簡単な滝だったのか、あるいは滝自体なかったか？一方、左股も右股も滝となっている1360mの二股は、「石狩岳より」にも出てくる。大島たちは二股の真ん中の尾根から高巻いて左の滝の上に出て、私たちのルートも同じ。巻き道が100年変わらぬのだ。

判然としない源頭付近のルート

さて、この先、大島たちがたどつた道筋が判然としない。

《登り切つて再び左の瀑布の上に出て、水を伝わってなお続いて行く。もう水はささやかな流れとなつて(中略)水の絶えるまで辿りつめて、十時には遂に(中略)高層湿原の一角に達した。標高一四八七米突(中略)熔け爛れた熔岩の斜面を飽きる程登つてトムラウシと化雲岳との鞍部に達し》

最初の一文からは、滝の上の本流をそのまま詰めたように取れるが、それだとすぐ源頭にはならないし、湿原にも出ない。標高の記述から考えると、登山地図などに「神々の庭」と表記されている北の

湿原に登り、ヒサゴ沼への分岐のコーで稜線に出たとも思われるが、私たちは本流通しに行く。再び小さな滝やナメが現われて楽しい所水が切れてお花畑となり、雪溪を越え、稜線のコールへ向かつて巨岩帯に突入する。

ようやく稜線に出たのは15時。残念ながらトムラウシ山を往復する時間はない。山頂に背を向けて縦走路を北へ向かうと、右下に今日の幕营地・ヒサゴ沼が青く見えてくる。この沼の名前は「石狩岳より」には出てこない。まだ名前がなかったのだろう。

「降り続けて一つの青紫色の無気味な光をしている沼に達した。残雪が岸の一部に輝いている。この沼があの大河、十勝川の真正の水源の一つをなしているらしい」とあるのが、この沼のことか？ここから流れ出るヒサゴ沼沢はトムラウシ川を経て十勝川の本流に合流している。分岐から慎重に雪溪を降り、登山者でにぎわう沼の畔にテントを張った。

26日は晴天の中、トムラウシやニベソツ、石狩岳の山並みを背後に化雲岳まで登ると、旭岳など表大雪のパノラマが広がる。ハイマ



ヌタプヤンベツ川最大の滝

ツの中の縦走路を五色岳から忠別岳とのコルへ。忠別岳避難小屋の前の雪溪から、ヌタプヤンベツ川の下降が始まる。参加メンバー全員が初めての区間だ。

雪溪や草地を降っていくと、お花畑の中を小川が流れる、のどかな風景が広がる。

《長い雪田を渡り、漸くヌタプヤムベツが一間近くの幅となつている岸の軟らかい草原を野営地と選定した時はもう奥山盆地は迫り来る果てなき闇の底に沈んで、なお石狩岳の尖端のみがただひとり地平深く沈んだ太陽の余照を紅く保っている》

と大島が書いたのはこのあたり。彼らはここで泊まったが、私たちのゴールはまだ遠い。巨岩の転がる崩壊地を降ると、1360m付近で8mほどの2段の滝が現われる。大島が「今までのうちで最も高そうで、且つ降るには少し面倒である。嘉助と田中君は右手の灌木の叢生した急崖を迂回し、浅市と自分が階段のような滑り易い岩を伝わって降りた」と書いている滝はこれか。大島たちが降った右岸水流脇の柱状節理の階段状も行けそうだったが、荷物が重いので大事を取り、嘉助たちと同様に右岸側を巻き降る。

消え失せた針葉樹の大森林

傾斜の緩い単調な川筋を、鹿道を使って兩岸のヤブをショートカットしながら先を急ぎ、最後は崩壊したヌタクヤンベ林道を歩いて、車を置いてある林道入り口に着的たのは17時過ぎだった。車で層雲峡方面に向かい、ヌタプヤンベツ川に架かる沼の原橋から下流を望むと、100mほど先に石狩川本流との合流点が望めた。大島が、《流れに沿いつつ暗い樹蔭を急ぐとだんだん前面が明る

くなって、樹幹の間に何かしらきらきら輝いている。馳けるようにしてそこへ近づいて見るとそれは広い大きな冷やかな河面だった。石狩川の本流であつた。これまで幾度かあらぬ想像と強い憧憬を以って胸に描いたことのある（中略）石狩川の水脈の人知れぬ姿を、今眼の前に置くとき自分の胸は抑え切れぬ喜びに躍らざるを得ない》と書き、対岸で黒い犬を連れた2人のアイヌの狩人と邂逅して感慨にふけた場所である。だが、ここに往時の面影はない。

ヌタプヤムベツを降りながら大島は「今日はいよいよあの暗いトドマツやエゾマツの陰鬱な原生林に蔽われた、人跡の稀れな盆地の深い寂寞のなかにゆくことが出来る」と期待に胸を膨らませ、針葉樹林に入って「始めて自分はこの北地に特有のトドマツとエゾマツの強烈な樹脂の漂う、暗緑色の薄暗い樹蔭を歩くことが出来た」と感激しているのだが、残念ながら、もはや鬱蒼とした針葉樹林などどこにもない。100年前の姿を想像することは難しかった。

今回の山行はここで終わったが、大島たちの山旅はさらに先へと続いており、私たちもこの先を来夏にはたどりたいと考えている。「石狩岳より石狩川に沿うて」のタイトルからも分かるように、彼らの山行の核心は石狩川から石狩岳そして再び石狩川へ、という後半部分にあるからだ。一方でこの部分は、ルートがはっきりしない箇所も多い。当時の地図が不正確で地形上の誤りが多かったこと、当時と現在では川・沢や山の呼称が変わっていることなどが理由だ。

7月の山行に先駆けて勉強会を開き、大島たちがどこを歩いたのかを検証し、ルートのかんりの部分を確定させることができた。行程の最後の石狩川本流は大変貌を遂げている。それでも、どれだけ変貌したか見定めるためにも、ここをたどってみたいと思う。

*「石狩岳より石狩川に沿う（ふて）『登高行』第3年（1921年）／『山 研究と随想』（1930年）所収

*本文中の引用は全て『山 大島亮吉紀行集』（山と溪谷社、ヤマケイ文庫、2018年）より

HISTORICAL EPISODE

英国山岳会に寄贈した
五百城文哉の掛け軸の行方

平林克敏

今回、日本の樹木や草花を中心に描いた明治の画家の美しい作品を添えて、日本山岳会の歴史にまつわる、隠されたエピソードを紹介します。

JAC創立百周年記念事業（2005年）は、総称して「登山と文化」を基本理念に置き、多くの会員の方々と話し合い、取り組みまして、私はこの事業企画の責任者として実行委員長を務めさせていただきましたが、あれからもう15年になります。



寄贈された「晃嶺群芳之図」と同等の掛け軸

その折に、明治期に活躍した洋画家、五百城文哉（1863～1906）の作品を集大成した展覧会を開催しました。東京ステーション・ギャラリー（財団法人東日本鉄道文化財団）を主催者に、水戸市立博物館を共催としてJACが企画・協力する形で実施しました。展示会は大成功で、多くの方々から高い評価をいただきました。

このときに編纂した『甦る明治の洋画家 五百城文哉の咲き競う百花百草』は高山植物を描いた実

にすばらしい一冊で、監修の寺門寿明・水戸市立博物館長はじめ、編集に携わった田中晴子学芸員、並びにJACの関係者の皆様に感謝あるのみです。ときどきこの美しい写生図を開き、回想一入です。この一冊に収められている晃嶺群芳之図（水戸市立博物館蔵）と全く同等の掛け軸が、明治39（1906）年の『山岳』第1年第1号に掲載されているもので、JACが英国山岳会に寄贈した高山植物の掛け軸ではないか、と判断します（今回、同等品を掲載）。

明治美術の研究家で収集家でもある高野光正氏（愛知県在住）が、寺門館長とロンドンに行つて調査したところ、ウェストンは英国山岳会に渡していないことが判明しました。英国アルパイン・ジャーナルの記事には「カケモノ（Kakemono）」という表現で五百城の作品に触れていますが、現物は

ウェストンが私蔵したまま行方不明となり、英国山岳会には保管されておらず、今日に至っています。2004（平成16）年、JACの

創立百周年記念の前年、会長の意向を受け、私が代表して英国山岳会はじめ、欧州各国の主な山岳会を表敬訪問してきました。その折に英国山岳会で、ウェストンに託したこの作品について、関係者にロンドンの山岳会ルームまで来ていただき説明を受けましたが、何一つ手掛かりになるものはありませんでした。大変残念なことです。

英国山岳会は、他国から贈られた資料など寄贈品については特に厳格に管理する伝統がありますから、この高山植物の掛け軸が記録にさえ残っていないことは、不思議としか言いようがありません。JACの皆さんが思うほど、ウェストンは信用に値する人物ではないという想いが重なります。この点については武田久吉氏（博物学者）と意を共有するものですが、この掛け軸に関しても、いつかどこかで突然姿を現わすというのが世の常、今回もそうあってほしいと願うばかりです。

（元副会長、関西支部会員）

REPORT

2020年度自然保護全国集会を
奈良県吉野町で開催

自然保護委員会

10月24日(土)～25日(日)の2日間にわたり「2020年度自然保護全国集会」(自然保護委員会主催、関西支部自然保護委員会主管)が奈良県吉野郡吉野町で開催された。

今回はメインテーマを「吉野に学ぶ持続可能な自然との共生」とし、1日目はこれまで自然との共生を体現してきた吉野町の林業やヤマザクラの保全、修験道について、それぞれの第一人者を招いて講演会を行なった。続いて行なわれた各支部自然保護委員の活動報告では、コロナ禍の下での活動や参加者と共有すべき問題について報告がなされた。2日目はフィールド・スタディとして、青根ヶ峰方面散策と神社仏閣見学の2つのコースに分かれて行なわれた。

開催までの経緯について

昨年10月に開催された森づくり連絡協議会の際に行なった関西支部との打ち合わせから、今年2月の現地視察を経て当初7月9日(土)

10日(日)の開催を目指して準備を行なってきたが、折からのコロナ禍により、開催はいったん見送りとなった。その後、都道府県をまたいだ越境移動が解禁となり、イベント等についても行政より開催基準が示されたため、今回の開催に踏み切ることとした。

今回の開催に当たってはソーシヤル・ディスタンスの確保を最優先させるため、講師を含めた定員を40名と大幅に絞った。そのため参加募集の告知については会報での募集を取りやめ、各支部宛に通知、自然保護委員会および森づくり関係者に限定した。対象には高尾の森づくりの会も含まれており、昨年の森づくり連絡会議に自然保護委員会が出席したことを契機として、今後、相互の連携を深めるために参加を呼び掛けた。

参加者(講師等を除く)の内訳は古野会長、坂井副会長、飯田担当理事以下、主管である関西支部が17名、自然保護委員会3名、群馬

支部1名、神奈川支部1名、静岡支部2名、東海支部1名、京都・滋賀支部2名、広島支部3名、四国支部1名、高尾の森づくりの会2名の合計36名で、多くが関西支部に隣接する支部からの参加。

開催に当たり、主催団体代表として挨拶に立った古野会長は、まだ予断を許さないコロナ禍の中で今後も「正しく恐れながら」活動を進めることと同時に、今後の日本山岳会の活動の一例となる開催であると考える。歴史ある自然保護委員会の活動を継続させることの大切さについても語った。

吉野町に関わる3つの講演会

これまでの全国集会では、基調講演を参加者全員で聴講した後にメインテーマに因んだ3分科会に分かれて意見交換が行なわれていたが、今回はそれを取りやめ、吉野町について林業、ヤマザクラの保全、修験道と3つの分野からのアプローチで講演会が行なわれた。

吉野町長で、山守七代目の林業家である中井章太氏の講演「吉野林業と山林管理について」は、西暦1500年ごろより隣接する川上村から始められた人工造林と、3



全国集会参加者一同で記念写真に収まる

00年続く吉野林業特有の「山守制度」の歴史、「密植多間伐」や「長伐期」などの育林技術、「葉枯らし乾燥」などの伐採技術や樽丸製造を中心とした産業について講演された。

公益財団法人・吉野山保勝会副理事長で竹林院四十一世院主である福井良盟師の講演「吉野の桜は、吉野の桜の由来について。修験道の開祖・役行者が修行の折に金剛蔵王権現の姿をヤマザクラの木で刻んで祀ったことが由来とされ、以降、行楽の花見のためではなく信仰の証として植え続けられたものであること、その吉野の桜について数多くの文人墨客が詠んだ歌

の紹介を交えて講演された。

修験本宗総本山金峯山寺渉外室長で奥駆総奉行である田中岳良師の講演「登拝の心〜吉野大峯の山々でご開祖に磨く〜」は役行者を開祖とする日本独自の自然崇拜思想と仏教、道教、陰陽道が融合した修験道について、我々が登る「登山」と、あえて山頂を通らない「登拝」について、山との向き合い方を対比させながら、その歴史と世界観について話された。

引き続き支部活動報告がなされ、活動がままならない状況下での様子、また、少しずつ活動を始めた支部からの活動や、地元で危惧される開発行為による山岳環境破壊への懸念について報告があった。

2日目はフィールド・スタディ

2日目のフィールド・スタディは、およそ半数に分かれて青根ヶ峰への散策と神社仏閣への散策へ。青根ヶ峰への散策コースは当日、快晴に恵まれた。送迎バスを降り大峯奥駆道をたどる。青根ヶ峰のピークは868mで近い。視界の開けた尾根道からは、延々と連なる山々が遠く熊野方面まで眺められた。修験道の170kmのルート

は通常7日間を要することだが、早い人は5日間で歩くらしい。昨日の講師、田中岳良師よりお聞きした「登拝」という修行の道である。旧女人結界の碑を通り、鹿の鳴き声を聞きながら西行庵まで往復する。帰路は上千本、中千本、下千本の道を「朝日に匂う山桜花」ではないが、秋色に染まり始めた木々を楽しみながら下った。

神社仏閣の散策コースは中千本エリアから竹林院、桜本坊、喜蔵院、勝手神社、如意輪寺(後醍醐天皇陵)、吉水神社、金峯山寺など数多くの神社仏閣を巡りつつ吉野駅まで下ったが、金峯山寺蔵王堂では特別開帳中の本尊「金剛蔵王大権現」を拝観する機会に恵まれた。

*

開催に当たり、コロナ禍の中で全国集会を開催する我々を受け入れてくれた吉野町の関係各位、これまで厳しい状況下で準備を行なってくれた関西支部自然保護委員会に感謝申し上げたい。いまだ先が見通しにくい状況であるが、今後今できることを念頭に、少しずつ委員会活動を進めていきたい。

(本部自然保護委員会委員長

谷内 剛)

令和2年度 第10回登山教室指導者養成講習会の案内

日本山岳会支部事業委員会

登山教室・リーダー育成事業援助として、必要な知識と技術を学ぶ指導者養成講習会を、昨年に続き「安藤百福センター」で開催します。

今年度は、新型コロナウイルスの感染予防対策を考慮して貸切りバスによる移動は避け、猪熊気象予報士による座学講義と、同センター周辺のフィールドで、野外でのライブ講座を行います。

登山のすばらしさを教え、安全な登山を実践できる資質を具えた会員の増強による支部活動の一層の発展を目的として、技術講習を以下のとおり行ないますので、奮ってご参加ください。

◆主催…公益社団法人日本山岳会支部事業委員会

◆後援…公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団

◆日時…令和3年2月13日(土)13時集合後、座学講義／14日(日)同センター周辺のフィールドにて野外実技講習後、15時30分散会予定。

◆場所…安藤百福記念自然体験活動指導者養成センター(長野県小諸市大久保1100、JR小諸駅よりタクシー10分)

◆参加費…4000円(概算)宿泊費・食事3食・資料代を含む。

参加費は受付時に集金。

◆講義内容

【座学講習】「新型コロナウイルス禍と山岳遭難救助活動」(仮題) 講師Ⅱ長野県警察山岳遭難救助隊／「登山指導者向けの気象リスク・マネジメント」講師Ⅱ猪熊隆之(ヤマテン代表)

*夕食後、講師を囲んで懇親会を予定しています。

【実技講習】安藤百福センター周辺の浅間・ハケ岳パノラマトレイルにて「山の天気ライブ授業(観天望気)」講師Ⅱ猪熊隆之

◆参加資格…日本山岳会会員で、支部山行・登山教室のリーダーを目指す者。

◆募集人員…20名

◆締切日…令和3年1月20日(水)。定員になり次第締め切ります。

◆申込み方法…11月下旬、各支部長宛に送付する実施要項を確認のうえ添付の申込み書に記入、メールにて左記アドレスにお送りください。

◆申込み・問合せ先Ⅱ支部事業委員会・中村哲也まで。

✉ jae-shbu@jae.or.jp

地域発「山の日」レポート② 越後支部

「山の日」を起爆剤に「越後YOUTH」スタート

越後支部長 桐生恒治

越後支部「山の日」記念事業は、毎年7月25日の「高頭祭・弥彦山たいまつ登山祭」を事前行事として開催し、8月11日、当日行事として「糸魚川ジオパーク子ども登山教室」を実施している。これらの報告については、本会報「支部だより」欄で全て掲載済みであるため、割愛させていただきます。

現在、支部の最重要課題として「越後YOUTH」を創設し活動を開始しているが、「山の日」を一つの起爆剤として位置付けた展開を

しており、今後の支部活性化の基盤行事に育て上げるべく取り組んでいる状況を紹介したい。

2018年度の高頭祭・弥彦山たいまつ登山祭には、野澤誠司副会長に参加していただき、その折に本部YOUTH CLUBの活動状況などの説明を聞くことができた。現在、その成果が徐々に表われており、若手メンバーが中心となり活発に運営されていると聞かされた。その成功例を越後支部にも導入したいと思い、野澤副会長にアドバイスをお願いして協力を求めたところ、「ぜひ一緒にやりましょう」との温かい申し出をいただき、取り組む決意をした。

昨年5月の越後支部総会で、「YOUTH委員」設立の決議をして取り組み始めたが、具体的計画に基づく運営を決めたわけではなく、支部長直轄組織として掛け声先行の行動追従形で動き始めた。YOUTH参加条件を本部同様に60歳以下としたが、若手新入会員の勧誘を最優先課題として注力し

た結果、この1年間に50代3名、40代1名、30代2名の入会者を迎えることができた。

若手メンバー育成をバックアップする手段として、支部の枠組を超えた交流を推進したいと考え、本部Y・Cとの連携を主軸として進めるため、昨年11月にY・Cの方々と打合せを行なった。

具体的行動を支部会員に喚起するため、今年の会報「山・YOUTH CLUB版」1月号に「越後YOUTH現在胎動中」や、会報「山」2月号に「越後YOUTH設立経緯とその取り組み」と題して寄稿し、決意も新たに各種行事を実施する予定であった。

しかし、残念ながら2月ごろからのコロナ禍による行事開催の自粛要請で、YOUTH活動の事業計画を見直さざるを得ない状況となった。計画していたのは、3月の上越国境で本部Y・Cと雪崩講習や雪上訓練を兼ねた交流登山、7月25日の高頭祭・弥彦山たいまつ登山祭で本部Y・C約20名との交流や懇親会、8月11日「山の日」子ども登山教室への協力依頼を兼ねた支部リーダーとしての経験、10月の「山の天気ライブ授業」の現

地講習会で新人勧誘の計画、などが全て中止せざる得ない状況となり、残念ながらYOUTH活動の盛り上がりにもストップが掛かってしまった。

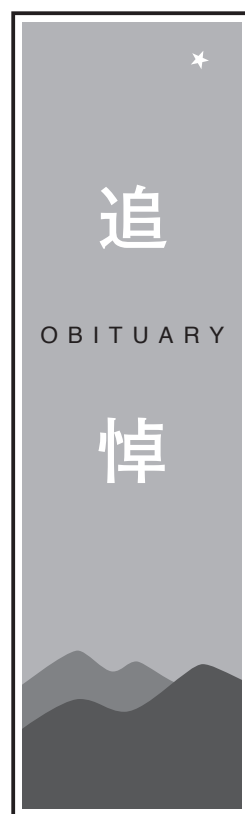
支部活動が身動きできない現状だが、越後YOUTHに興味を持つ若手会員を集めて活動できる態勢を早急に立て直したい。本部のY・Cを含め、すでにYOUTH事業に先進的に取り組んでいる関西支部、東海支部などのカリキュラムを参考にして、全国組織である日本山岳会の強みを活かした情報交換や交流などをコラボレーションしながら、越後YOUTHを軌道に乗せる取り組みを続けたい。



令和元年度の第26回高頭祭(弥彦山にて)



令和元年度の第3回子ども登山教室(蓮華温泉にて)



Climbing&Medicine・85

ウユニ塩湖で高山病を発症した例と問題点

荻原理恵

(昭和大学医学部公衆衛生学教室講師、元外務省医務官)

私は2001～2020年まで外務省の医務官としてマダガスカル、ボリビア、オーストリア、ラオス、ロシア、チュニジアなど海外に勤務した。今回、2003～2005年に勤務した在ボリビア日本大使館勤務時代に経験したウユニ塩湖の高山病の症例について報告し、検討したい。

2004年8月、ウユニ塩湖(標高3700m)のヘルスポスト(救護所)のボリビア人のドクターから大使館に電話が入り、日本人が高山病で入院しているので下山を説得して欲しいということだった。患者は69歳の男性で、スペイン語を話せ、独りでウユニ塩湖に旅行に来ていた。私は電話で下山するように説得したが、聞き入れなかった。経過をフォローしていたが、3日後に患者が昏睡になったという緊急救援要請が大使館に入った。私は陸軍のヘリコプター(費用1600USドルは患者負担)をチャーターし救援に向かった。現地で、患者に酸素投与、ステロイド静脈投与などの処置を行ない、陸軍ヘリコプターでサンタクルス市(標高400m)に移送し、総合病院のICUに入室させた。治療を開始したところ数時間後に意識が回復した。

しかし、患者は約10年前にオーストラリアで肝移植術を受け、免疫抑制剤を服用しており、院内感染を併発し、入室3日後に敗血症を起こした。家族が日本への搬送を保険会社に希望したが、保険会社は日本が遠いということで、マイアミ、その後、サンチャゴを緊急搬送先として提案した。家族がサンチャゴへの緊急搬送を承諾したとき、患



ウユニ塩湖

者の容態は悪化して飛行機搭乗が不可能な状態で、入室7日後に死亡された。高山病から回復したにもかかわらず合併症のために死亡するという、残念な結果になった。

問題点をまとめると、患者側の危険因子として、独り旅、肝移植後で免疫抑制剤を服用中、そして、致命的だったのは下山の決断が遅れたことが挙げられる。一方、保険会社にも問題があり、直ちに日本に搬送されていれば救命された可能性も否定できない。患者の家族は保険会社に対し訴訟を検討したが、諸事情により断念した。在ボリビア日本大使館から保険会社へ、「今後、このような事例が生じないように、迅速に対応するように」勧告レターが出された。

改めて海外旅行の際、旅行保険に必ず入ることをお願いしたい。先進国はもちろん、途上国でも高度な医療を受けるための医療費は高額である。今回は旅行保険が十分稼働しなかったが、旅行保険に入らなかった場合、家族の負担は一層多大なものとなっただろう。



ウユニ塩湖のヘルスポスト

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。

日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会 <http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html>

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

山行委員会

常念岳―西岳縦走に参加して

9月11日(金)～13日(日)に山行委員会主催の常念岳―大天井岳―西岳縦走に参加した。

初日は松本駅アルプス口に9名が集合し、ジャンボタクシーで一ノ沢登山口へ移動した。そこから樹林帯の中を常念乗越に向かつてひたすら登る。乗越にたどり着いたときの感動は忘れられない。常念小屋に荷物を置き常念岳に向かう。そのうちに雲行きが怪しくなってきたので雨具を着て無事常念岳に到着。記念写真を撮り、常念小屋に戻り、直ちに夕食となる。そのち歓談する。

2日目は、北アルプスの大展望を楽しみながら北に大きくそびえる横通岳、続いて東天井岳と進み、大天荘に荷物を置き大天井岳を往

復する。大天井ヒュッテへの巻き道は気が抜けなくてスリル満点。大天井ヒュッテの広場では若者も休んでいたがヒュッテは閉館。広場で昼食をとり、喜作新道を赤岩岳、西岳へと進み、西岳ヒュッテに到着。赤岩岳は急登で苦勞したが、全員無事に到着し安堵した。

今日は山小屋に早く着いたので夕食までの間ゆつくりと懇親を深める。

3日目は、昨日までと打って変わって朝から別れを惜しむかのような静かな雨の中、水俣乗越―大曲―槍沢ロッジ―横尾山荘―徳沢園―明神館―河童橋へと進み、上高地で解散。

私は、高山経由で名古屋から伊勢に無事帰ることができた。皆様大変お世話になりました。ありがとうございました。

(中野八千代)

山行委員会

四国八十八ヶ所歩き遍路 逆打ち 高知県

前を歩く人の足元が、はつきりと見える。柿の実が美しい秋の高知歩き遍路だ。10月15日から10月25日の10日間で、歩行距離約286km、足摺岬から室戸岬まで歩いた。お参りは、38番札所金剛福寺から24番札所最御崎寺だ。

参加者が善男善女のため、愛媛遍路と同様、好天に恵まれたと記したかったのだが、2日間だけ雨具を着けての歩行となった。雨は暖かいものだったので、一日中雨が降るといことがめつたにない



足摺岬から室戸岬の海岸線を行く参加メンバー

北海道育ちの私には、興味深いものだった。遍路道である足摺岬から室戸岬の海岸線がすばらしかった。大きく広く、この海はどこまで行けるんだろう。小さな葛藤などすぐ呑み込んでしまう雄大さ。この高知の海を見ながら修行した空海さんは、心の大きな人だったろう。これは、自分の足で歩き、風を感じながら、海を眺めなければ味わえない感情だろう。帰りのバスの車窓から海を見たとき、それが分かった。

今回、2回目の参加の私に、うれしいことがあった。四十町にある37番札所岩本寺。ご詠歌に、「八つのちり五つの社あらわしてふかき仁井田の神のたのしみ」とある。自分の名字と同じ音読みをする仁井田の郷に近いこのお寺の納経所のこと。思いがけず早い順番でご朱印をいただいたので、いつもならあたふた焦り、納経帳を詰めてリュックを背負うのだが、ベンチに座り納経帳の墨書の運筆をじっくり観ることができた。立ち上がってリュックを背負うとしたところ、仲間が「お金が置いてあるよ」と教えてくれた。机の角隅に慎ましやかに、100円玉が2枚

置かれていた。皆が「お接待だよ」と言ってくれたので、いただくことにした。この2000円は、思いがけず今まで感じたことのない喜びで、私の心をいっぱいにくれた。今、2000円は大切に仏壇の前にある。

また、この地区で作っている仁井田は、香り米として、とっても美味しくびっくりした。

歩き遍路は、歩いて良かったなあという余韻が帰宅してもしばらく続く。そして、大変な分だけ喜びが多いのが歩き遍路だ。今回もたくさん思い出を持ち帰った。同行していただいた会員の皆様、ありがとうございます。

空海の 足跡ありや 野菊みち
(足摺岬 38番金剛福寺へ向かいながら)
(新井田幸子)

緑爽会

緑爽会創立25周年記念講演会報告

去る10月24日(土)午後2時より、武蔵境駅北口にある武蔵野スイングホールにおいて標記講演会が開催された。「日本山岳会エベレスト登頂から50年 そのときエベ



熱気あふれる会場風景

レストで何が起こっていたか」と題し、当時の隊員の一人の神崎忠男会員を講師とした講演は、映像と神崎会員のウィットに富んだ話に終始し、聴衆の目と耳は舞台に惹き付けられていたようだった。

コロナ禍の中でのイベントであり、入り口で検温・消毒を行ない、会場内でのマスク着用を呼び掛けの開催だったが、マスメディアでも告知を行なったこと、好天の土曜日ということもあって、当日は119名(一般58名、山岳会会員61名)の参加があった。

初めに最近のエベレスト登山事情が映像で紹介され、当日の資料の説明があった。そのうち、壇上

に上がった当時の隊員4名(神山義明、長田正行、吉川昭、嵯峨野宏の各隊員(敬称略)から、それぞれの担当職務や当時の思い出などの秘話も語っていただいた。あまり知られていないエベレスト登頂を支えた隊員たちの状況を知る良い機会となった。それを受けて神崎会員からは、1970年の隊はチームワークが良かったことと、長田隊員が見事に好天の登頂日を予測したことが成功の要因であると話された。登頂者にはスポットライトが当たるが、それを陰で支えた隊員の苦労などは、なかなか表に出てこない。そこを皆さんに知っていただきたいかったので、何か事件があったのかと勘違いされた方もあったかと思うが、こうした演題にさせていただいた、と締めくくられた。

来場者は高齢の方の割合が高く、50年前のワン・チームで勝ち取った栄光の登頂を思い出しておられるようでもあった。さらにそのうち、スライドを見ながらお話があり終演となった。

帰られる会員の方々から「良かった」と声を掛けていただくなど好評で、後日、一般の参加者からも「感激した。往時の日本山岳会が持つ雰囲気強く感じた」とのお礼のハガキをいただいた。この講演会を開催できて本当に良かったと思ったことだった。

以上、緑爽会創立25周年記念講演の開催は、大変意義あるものになったことをご報告させていただきました。神崎会員、4名の隊員の皆様、ありがとうございました。

(荒井正人)

支部

だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

静岡支部

2020年「山の日」記念
親子登山―高山と牛ヶ峰

2020年の「山の日」は、新型コロナウイルス感染症拡大を回避するため、委員会では親子登山の取りやめを考えたが、好評だった昨年の参加者の中に、今年も継続して実施することを望む人たちがいたことに鑑み、再度、応募者数を縮小して実施することにした。

目的とする山は、静岡市を流れる安倍川の支流、蘆科川中流域左岸にある標高717mの高山と、隣接する牛ヶ峰にした。集合場所は高山の中腹にある水見色集落と



牛ヶ峰山頂での登頂記念撮影

し、集合時間は9時30分とした。また、駐車場として空いている畑を集落の農家から借用した。この山は、静岡市の「市民の森」として指定されており、眺めの良い山頂近くに「森の恵」と称する学習展示施設がある。8月5日締切り時の参加者は、親子5組の10人だった。

8月10日(晴)、参加者を2組に分けて会員を前後に2名、計8名を付けて歩いた。小学校1年生の女子から71歳のご婦人まで、ほとんどが山歩きは初めての人たち。参加者に名札を付けてもらい、集合場所準備体操をして10時に出発した。

先頭を歩く会員は、ゆつくりとしたペースで進み、30分に5分程度の休みをとって給水しながら歩いた。途中にある小さな池のほとりですぐ休憩し、会員が、池に棲んでいた龍と長者の娘の伝説について話をした。天気は良く晴れて気温は高い予報であったが、歩く山路はほとんどが杉や檜の人工林で、おおかた日陰であった。そのため懸念した熱中症になりそうな参加者や落伍者もなく、全員お昼前に頂上に着いた。

山頂からは静岡の市街地や海岸

線の展望が良く、子どもたちは自分の家の近くを探して見るほどの眺めであった。頂上の大きな山桜の木の下で食事を済ませたのち、会員による安全登山や山仕事の小講座を聞いた。こののち自由時間を取り、13時に集合して下山の途についた。下りは登りとは別のコース。途中にある「森の恵」に立ち寄り、見学したのち出発地の駐車場まで全員無事下山した。

(有元利通)

東海支部

コロナ禍でもますます楽しみな支部活動

今年は登山界においても、かなり特殊な年となった。自然を相手にしている我々でも、疫病という自然現象に翻弄されてきた。

当支部では、4月の緊急事態宣言を受け登山自粛、その後に県外移動規制・解除。また、第2波以降は、移動中、登山中の対策の徹底をもつて、各委員会による判断で活動を行ってきた。

東海支部は354名(9月末)が所属する大組織。そのため、20委員会と8同好会に分かれ、多岐の

活動が行なわれている。実は、来年が創立(1961年)60周年に当たり、2020年はそれに合わせた行事を活性化することになっていた。年度初めのコロナ騒動で委員会が中止されるなかで、楽しみにしていた猿投の森音楽祭、支部友ミーティングなど、会員が集まる行事の多くは中止せざるを得なくなった。

唯一残った企画は60山ラリー。これは、7種類のコースから各自がいずれかのラリーを目標に60山に挑戦するもの。すでに、2019年1月からカウントが始まっていたため、2020年度も引き続き各自が60山ラリーに取り組んできた。

ほかのコースと重複した山は自動的にカウントされ、複数のコースにチャレンジできる。60山達成者には、表彰とともに副賞(登山用品)が授与され、複数のラリー達成者には特別表彰が行なわれる。

7種類の60山コース(日本100高山、一等三角点の山、愛知県の山、岐阜県の山、三重県の山、静岡県の山、チャレンジコース)より選定する。すでに、多数の会員が60山を達成し、多い人は1年半で400近くの山に登頂した。また、



美濃富士60山ラリー同日登山で

11月3日は60山ラリー記念登山の日とし、皆が各地で同日登山を行った。

東海支部は、登山学校の活動も活発で、2020年度は37名が初級、中級、上級クラスに分かれ学んでいる。上級者は特待生制度を設け、次期指導員として養成講習を行なっている。一流登山家が先生となり、指導に当たることができると東海支部の強み。若い人材が育つのが楽しみである。また、登山学校同窓会を立ち上げ、登山学校OBの交流が図れるよう、バックアップを行なうことで、卒業生の支部定着も着実に実現している。

(今津英一朗)

北九州支部

森林巡視活動

本年、当初は北九州支部の森林保全一斉巡視活動を開催する予定だったが、コロナの影響で3月20日に個人山行として若杉山で行なうこととなった。そして、9月26日になって、やっと平尾台で一斉巡視活動を行なうことができた。ここでその2つの森林保全巡視活動を報告する。

3月20日(若杉山 個人山行)

JR篠栗駅の裏手にあるクリエイト篠栗に8時過ぎ集合。集合ののち、登山口近くの無料駐車場に車を止め、2台の車に分乗し楽園駐車場に向かった。駐車場には多くの車がすでに停まっていた。

楽園駐車場を9時前に出発。榊SLの案内で進む。10分ほどで綾杉に到着。樹高20m、幹周6mもある杉に皆歓声を挙げたが、榊さんいわく、「まだまだ大きい杉があるよ」とのこと。楽しみになってきた。

そののち、ジャレ杉に到着。これも大きな杉だった。ここから、はさみ岩に行くまでは足場が崩れか

かっている箇所があったり、案内板が別の方向を向いたりしている所もあった。案内板は、皆で正しい方向に修正した。

20分ほど歩くと、はさみ岩に到着。このはさみ岩は、弘法大師が杖の一撃で岩を割ったという逸話のある岩で、幅30cmの裂け目を通る。話によると、「善人は通れるが悪人は通れない」そうだ。なんとか全員通ることができ、ほっとひと安心。

奥之院には10時過ぎに到着した。そののち車道を進み若杉山山頂に到着。まだ時間もあったので、若杉の鼻まで進む。ここからは、宝満山をはじめ、三郡山などの眺望が開け、写真を撮ったりして過ごした。ここから神宮まで戻り、昼食タイムとした。

休憩のあと七又杉を巡り、いよいよ最大の大和の大杉へ。この杉は樹高40m、幹周16mもあり、大変見応えのあるものだった。もともこのコースは、大和の森遊歩道と言われており、大和の大杉はこのコースのメインにふさわしいものだった。大杉を見学後、米の山へ。山頂に向かう道は、なだらかなものと、急な階段をたどるも

のと2つあったが、皆急な階段を選ぶ。

山頂を通過し、展望所まで向かった。展望所は車で行けることもあり、多くの人でにぎわっていた。なかにはドローンを飛ばしている人もいて驚いた。展望所からの眺望を堪能したのは、大杉経由で登山口へ。当初の予定よりも2時間早く、13時過ぎに楽園駐車場へ到着した。

今回のコースは、森林セラピー地区にも選定されており、道にはサクラチップが敷いてある所もあり、香りを楽しみながら、癒されながらの山行となった。皆さんのお陰で楽しい山行となった。参加者7名。

(三宅明子)

9月26日(平尾台 一斉巡視)

「平尾台自然観察センター外来種駆除活動」を実施した。最初に、平尾台自然観察センターからの説明(セイタカアワダチソウの生態や駆除方法)を受けた。

その後、小穴周辺の散策道を中心に、2名ごとのグループに分かれてセイタカアワダチソウを抜く作業を行なった。

セイタカアワダチソウは、背丈

寄附金および助成金などの受入報告

(令和2年9月30日まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、そのほか
江川 知史 会員	50	上高地山研運営費
	50	総務委員会運営費
鈴木 幸子 会員	50	東海支部運営費用



セイタカアワダチソウの草原で

著者は探検家である。ただそのスタイルは、未開の地を探検するといったものではなく、「物語を旅する」をテーマに神話や伝説の伝承地を訪ねるミステリー・ハンターと言わなければならない。過去に



2020年8月
朝日新聞出版
四六判 262頁
定価1870円(税込)

剣岳—線の記

高橋大輔著

ロビンソン・クルーソーの住居跡を発見し『ロビンソン・クルーソーを探して』を著している。新田次郎の小説『剣岳・点の記』や映画で知られているように、1907年、それまで未踏峰と考えられていた剣岳に登った陸地測量部の柴崎芳太郎らは、そこで古代の仏具を発見した。著者はヒマラヤと一緒にトレッキングをしていた仲間から、そのことを初めて知らされる。興味を抱いて小説を読み進めるうちに疑問が膨らみ、それはだれであったかを突き止めた



図書紹介

が2m近くになるものや、ツタが絡んだものもあり、場所によってはなかなか抜けない所もあった。また、見通しが悪くなっている箇所もあった。小穴周辺の散策道の作業終了後、中峠方面に戻りながら、散策道の両脇でセイタカアワダチソウが群

生している場所を中心に再度作業を行なった。約3時間の作業の結果、多くのセイタカアワダチソウを抜くことができ、散策道自体も見通しが良くなったため、歩きやすくなった。

(赤瀬榮吉)

図書受入報告(2020年9~10月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
日本ネパール協会(編)	現代ネパールを知るための60章(エリア・スタディー No.178)	397p/19cm	明石書店	2020	編者寄贈
大野秀樹	本を読むたのしみ:大野秀樹書評集成	461p/20cm	武久出版	2020	編者寄贈
田口計介	全国駒ヶ岳の民俗誌:駒ヶ岳ファンクラブ創立30周年記念	170p/26cm	駒ヶ岳ファンクラブ	2019	吉田修氏寄贈
沖田完治	大雪山系周回飛行:沖田完治写真集	64p/30cm	沖田完治(私家版)	2020	著者寄贈
森下恵介	吉野と大峰:山岳修験の考古学	251p/22cm	東方出版	2020	出版社寄贈
高橋大輔	剣岳 線の記:平安時代の初登頂ミステリーに挑む	260p/19cm	朝日新聞出版	2020	出版社寄贈
栗秋正寿	山の旅人:冬季アラスカ単独行	256p/20cm	閑人堂	2020	出版社寄贈
新井靖雄	雪の屋久島:Severe Winter Yakushima	111p/28cm	言叢社	2020	著者寄贈
齋藤繁	山登りでつくる感染症に強い体(ヤマケイ新書)	229p/18cm	山と溪谷社	2020	出版社寄贈
副見恭子	ライマン雑記:A Note on Lyman	243p/27cm	松本智子・井上和子(私家版)	2020	発行者寄贈

いと思う。平安時代に、いつ、だが、どの(ルートで)、どこに、なぜ、どのように登ったかの5W1Hを、情報集めから始め、実際に剣岳登山を繰り返すなかで解明しようとするのである。

多くの資料を読み、博物館、図書館などを訪ねる一方、まず別山尾根を登って山頂の遺跡を調べる(多くの登山者は山頂で握手し祠に手を合すが、山頂遺跡などには目もくれない)。結果として当時の登山技術から別山尾根ルートは取り得ないと考える。岩登りの技術もなく、アイゼンもない時代に登れるルートとして早月尾根に焦点を当てる。

立山開山と剣岳との関係を調査すると、立山とは別に剣岳開山の歴史があり、その痕跡を探しにたびたび上市町を訪ねる。大岩山日石寺訪問から次々と資料が見付かり、護摩古道の存在を知る。立山川のハゲマンザイから早月尾根に取り付くルートを想定する。著者は情報の中から推理を働かせ、なおかつ当時の修行僧の気持ちや視線で山を歩けるようだ。尾根上1920mのキワラ三角点は柴崎芳太郎が設置したものであったし、

冠松次郎もその後、同様にキワラ谷を登っているが、反対側にこそ当時のルートがあると、そこを実際に登ってみることで実証しようと試みる。このときの模様は、NHKの番組で放映されたのでご存じの方も多いと思う。

こうして5W1Hが解明されていくことになる。字数の関係で詳細は書けないが、この謎を解くプロセスは、推理小説のごとく読んでいただくのが一番である。

(荒井正人)



令和2年度第6回(10月度)理事会 議事録

日時 令和2年10月15日(木)19時00分～21時15分

場所 集会室およびオンライン

【出席者】古野会長、野澤・坂井各

副会長、永田・萩原・古川

各常務理事、安井・清登・

清水・飯田・近藤各理事、

石川監事(坂井副会長は所用のため審議事項は欠席)

【欠席者】山本副会長、柏理事、黒

川監事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・寄附受人承認の例外運用について

審議において、寄附者の匿名表示が保証人を付けることで可能であるか審議した。(賛成10名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・コロナ対応における告知について再度検討することとした。

(古野)

2・名誉会員のありかたについて協議し、継続で協議することとした。(古野)

【報告事項】

1・入会希望者5名、準会員入会希望者8名について入会承認を行ったと報告があった。(古野)

2・寄附金2件の受領について報告があった。(古川)

3・花王株式会社から寄附の申し出があったことが報告された。

(永田)

4・全国支部懇談会の中止と開催方法の検討について報告があった。(坂井)

5・『山岳』のデジタル化公開について報告があった。(飯田)

6・博物館連絡会議の開催について報告があった。(清水)

7・支部合同会議について報告があった。(永田)

8・評議員懇談会について報告があった。(永田)

9・会員名簿の返信ハガキについて報告があった。(永田)

10・年次晩餐会のキャンセル費について報告があった。(永田)

11・植村記念財団のエベレスト講演会の名義使用について承諾したという報告があった(永田)

12・会報「山」10月号の発行について報告があった。(節田)

ルーム誌

10月

- 1日 アルピニズムクラブ
5日 記念事業委員会
6日 常務理事会 スケッチクラブ
7日 山行委員会 休山会
8日 山想倶楽部 九五会
9日 図書委員会
12日 総務委員会 スケッチクラブ
13日 山岳研究所運営委員会 フ
オトクラブ
15日 理事会
16日 総務委員会
19日 資料映像委員会 緑爽会
20日 会報編集委員会

今年も年末年始「雪山天気予報」を配信します

気象遭難防止を目的に、北アルプスおよびハケ岳を対象として、年末年始の雪山天気予報を配信（12月17日～1月9日）します。天気予報は、登録いただいたメールアドレスに期間中、毎日配信します。利用は無料です、日本山岳会会員でなくても受信できます。告知ページのURLは、

<https://jac1.or.jp/document/20190805433.html>

- 21日 家族登山普及委員会 つくも会 三水会
22日 01会 山遊会
23日 「山の日」事業委員会
26日 資料映像委員会 青年部 緑爽会
27日 00会 平日クラブ
28日 改革事業推進委員会 家族登山普及委員会 麗山会
29日 スキークラブ
10月来室者 217名

◆雪が織りなす物語

市立大町山岳博物館企画展

雪はなぜ水循環の鍵になるのか、なぜいろいろな形があるのか、北アルプスにはなぜ大量の雪が降るのか、山に降る雪はなぜ水資源として貴重なのか、降ってくる雪はなぜ空の掃除屋と呼ばれるのか、などなど雪の不思議と面白さを科学する、山岳博物館ならではの企画展。

インフォメーション

会員異動

物故

- 中村純二(4541) 20・10・21
石浦邦夫(9055) 20・10・18
藤田 傳(13722) 20・10・15
退会
佐藤 進(8341)
太田九二(13092)
竹森壮孝(16035) 関西
原 晴(16096) 東海

会場

市立大町山岳博物館

〒398-0002 大町

市大町8056-1 ☎

0261-2210211

時間 午前9時～午後5時
会期 10月3日～2021年1月17日

観覧料 大人450円 高校生

350円 小中学生200円

◆編集後記◆

●昨春、多量の残雪と降雪で途中下山となった大佐渡山脈縦走のリベンジに、先月下旬、千葉支部一行12名が来島しました。25日、晴れの天気予報に気を良くして勇躍、ドンデン山から金北山を目標し縦走スタート。ところが道半ば、一天にわかにかき曇り、はるかシベリア大陸からの強風と雨が来襲、さらに雹(ひょう)まで降ってきました。

●嵐は短時間で収まりましたが、それからコルを通過するたびに強風が吹き荒れ、女性陣は匍匐前進するほど。これほどの強風の経験は、冬の富士山か北アルプス、那須岳くらいでしょうか。それでも美しい紅葉を愛でながら無事、日本三百名山の金北山に登頂できました。キンポク登山ならぬキンパク登山的一幕でした。(節田重節)

日本山岳会会報 山 906号

2020年(令和2年)11月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重節
E-メール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社